



## 説教要旨 「人知を超えた平和」

### フィリピの信徒への手紙 4章 4～9節

パウロは、フィリピの教会の人々に、「神の平和がある」、平和の神が共におられるのだと語ります。それはフィリピの教会に対立と分裂があり、“平和”では無かったからこそこのように語るのです。フィリピの教会では、熱心に奉仕をしてきたと思われる二人の信徒が対立をしていました。熱心であることは時として頑迷さに繋がります。互いに譲りあえずに対立が深まっていくことを、わたしたちもしばしば目撃します。パウロはそのような対立によって喜びが失われてしまっているフィリピの教会に、「主において常に喜びなさい。」と語りかけているのです。

パウロはこの「フィリピの信徒への手紙」を、牢獄の中から書いています。キリストを宣べ伝えるがために、迫害され、自由を奪われ、暴力にさらされているのです。わたしたちが思い描く“平和”とは程遠いところに身を置いているのです。にも拘わらず、パウロは、キリストによる「神の平和」を確信しています。わたしたちの目に見える現実を超えて、そこに確かにある神の平和を、しっかりと見つめているのです。捕らえられ自由を奪われた牢の中から、とうてい喜びなど見出せないと思えるような中から、訴えかけるのです。「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい」(4節)と。“主が共にいて下さる”。ただこのことこそが、パウロの語る「喜び」の根拠なのです。

主はすぐ近くにおられる。あなたはそのことを忘れていたのではないか。主によって、はかりも知れない罪を赦されたあなたなら、今日の前にいる相手を赦せるだろう。パウロは対立の中にあるフィリピの教会の人々にそう語りかけているのです。

わたしたちたちはいつも、多くの悩み事を抱えています。いくら「思い悩むな」と言われても悩みはそうそう無くなりません。パウロが語っているのは、その悩みを一人で抱え込むのではなくて、神様に祈って、神さまにその悩みを打ち明けなさいということです。人間の頭であれこれと思い悩んでいないで、父なる神にゆだねなさい、そうすれば、わたしたちの予想もしないような平和が与えられるのだ、と。

